

地下壕 戦争遺跡へ整備

錦町で昨年、戦時中に造られた人吉海軍航空隊の地下壕や作戦室、無線室などが見つかった。町や地元の住民グループは、戦争遺跡として整備する取り組みを始めた。先行する千葉県館山市では2004年から、館山海軍航空隊・赤山地下壕跡が平和学習や観光資源として活用され、戦後70年の今年も多くの人を訪れている。現地を訪ねた。

（河北英之）

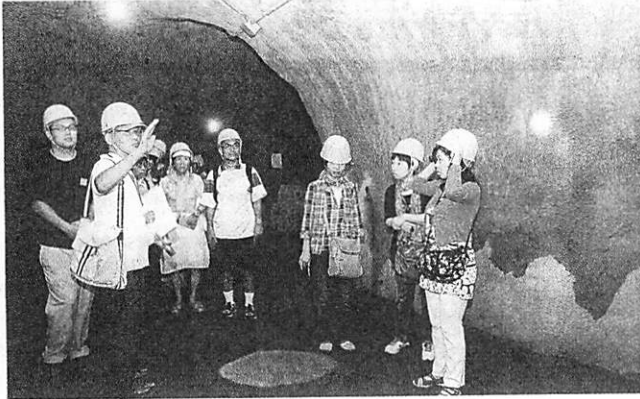


今年17日、地元で戦跡のるほどの高さの通路の所々保存活動に取り組みNPOに、広さ60畳ほどで高さも法人「安房文化遺産フォー」敷地ある空間が設けられてラムの金久修さん(70)のいる。

案内で地下壕へ。

土のおいが漂う中を懐中電灯を手に一歩一歩進む。「ここには通信部隊が詰む。穴はまるで迷路のようめ暗号解読などをしている。四方に延びており、総延長は1.6キロ。頭をかすめ削った痕跡が鮮明に残る。地盤がもろいため発破や重機が使えず、ほとんど手掘りで造られたという。1時間ほどの間に、地元の親子やツアー客が次々に訪れる。「地下壕を造ったことを得なかった戦争というものを、肌で感じてもらえば」と金久さん。

房総半島の南端、東京湾の入り口に位置する館山市は戦時中、街全体が首都・東京を守るための「要塞」とされた。多くの砲台が造られ、1930年に館山海軍航空隊が置かれた。戦争末期には本土決戦に備え、約7万人の兵士が集結したといわれる。赤山地下壕は、空襲を避けるための施設とされるが、資料が乏しく、掘られた時期などは判然としない。戦争体験者の証言で、戦闘指揮所や格納庫の存在が明らかになった。



千葉・館山市 平和学習、観光の拠点に

地下壕は戦後、そのままの状態で見つかった。市民団体の調査で約20の施設が見つかった。錦町



人吉海軍航空隊の地下壕跡からは、作戦室や無線室など約20の施設が見つかった。70年間、地下に眠っていた「戦跡」をまちづくりを生かす動きが始まっている。

同隊は1944年2月に発足。飛行予科練習生が飛行訓練などを受けていたが、1年5カ月で解散された。旧軍の地下無線室の確認は九州でも数例しかないが、地下壕の存在は地元でもほとんど知られていなかった。

錦町は今年2月、基地跡活用研究プロジェクトチーム(6人)を設置した。まずは住民に知ってもらおうと、町広報紙で特集。地区ごとに開く町政座談会でも報告し、情報提供を求めている。

人吉海軍航空隊

錦町も活用チーム

最大の課題は安全性だ。地元の高校教師だった愛沢伸雄さん(63)も同NPO代表。市は本格的な地質調査を実施。04年4月、安全が確認された部分のみ(長さ約2500メートル)の公開を始め、館山市も保存・活用に乗り出した。

「負の遺産」のイメージもある戦跡の保存や整備には消極的な自治体も少なくないが、同市は歴史的価値があると判断。97年、子どもたちの平和学習や観光の拠点として生かす方針を決めた。

今年3月末までの11年間

最大の課題は安全性だ。地元の高校教師だった愛沢伸雄さん(63)も同NPO代表。市は本格的な地質調査を実施。04年4月、安全が確認された部分のみ(長さ約2500メートル)の公開を始め、館山市も保存・活用に乗り出した。

「負の遺産」のイメージもある戦跡の保存や整備には消極的な自治体も少なくないが、同市は歴史的価値があると判断。97年、子どもたちの平和学習や観光の拠点として生かす方針を決めた。

今年3月末までの11年間

最大の課題は安全性だ。地元の高校教師だった愛沢伸雄さん(63)も同NPO代表。市は本格的な地質調査を実施。04年4月、安全が確認された部分のみ(長さ約2500メートル)の公開を始め、館山市も保存・活用に乗り出した。

「負の遺産」のイメージもある戦跡の保存や整備には消極的な自治体も少なくないが、同市は歴史的価値があると判断。97年、子どもたちの平和学習や観光の拠点として生かす方針を決めた。

今年3月末までの11年間

最大の課題は安全性だ。地元の高校教師だった愛沢伸雄さん(63)も同NPO代表。市は本格的な地質調査を実施。04年4月、安全が確認された部分のみ(長さ約2500メートル)の公開を始め、館山市も保存・活用に乗り出した。

「負の遺産」のイメージもある戦跡の保存や整備には消極的な自治体も少なくないが、同市は歴史的価値があると判断。97年、子どもたちの平和学習や観光の拠点として生かす方針を決めた。

今年3月末までの11年間

最大の課題は安全性だ。地元の高校教師だった愛沢伸雄さん(63)も同NPO代表。市は本格的な地質調査を実施。04年4月、安全が確認された部分のみ(長さ約2500メートル)の公開を始め、館山市も保存・活用に乗り出した。

「負の遺産」のイメージもある戦跡の保存や整備には消極的な自治体も少なくないが、同市は歴史的価値があると判断。97年、子どもたちの平和学習や観光の拠点として生かす方針を決めた。

今年3月末までの11年間

特報 Report

開機を守る掩体壕や砲台跡などの戦跡が47カ所確認されているが、赤山地下壕以外ほとんどが民有地。市が関与することが難しかったため、NPOや住民団体が地権者の了解を得て管理やガイドツアー(有料)をしている。

愛沢さんらのNPOにも約20人の語り部がいる。同市教委は「行政が及ばない部分を補ってもらっている。民間との連携が大切」と強調する。

戦争遺跡の意義について、愛沢さんは語る。「戦争の悲惨さや当時の人々の暮らしをまざまざと教えてくれる。私たちは貴重な戦跡を残し、伝え続けていかなければならぬ」

年度内に調査測量などに着手したい考えだが、公開までは、安全性や地権者の了解、費用負担など課題は多い。5年計画で進める予定と見られる。森本完一町長は「安全性の確保が大前提。戦争の悲惨さを伝える戦跡として、少しずつ整備していければ」と話している。

一方、住民有志は同地下壕を中心に、人吉市や湯前町などに残る防空壕などの調査・研究に取り組む。金山充さん(64)湯前町は「戦跡の保存・活用が、人吉球磨全体の活性化につながれば」と期待する。

東工大によると、東工大のデータ保存拠点で昨年8〜10月、データの書き込みを行う部分に障害が起き、保存データ約15万件が破損した。うち1072件はコピーも破損し復旧できず消失したという。